記念誌発刊のことば

宮城県葬祭業協同組合
理事長　菅原　裕典

私ども宮城県葬祭業協同組合はこの度、40周年を迎えることとなりました。

この記念すべき40年という節目の年を迎えることができましたのも、これまでさまざまな形で支えてきてくださった組合員の皆様、ご関係の皆様のおかげであり、厚く御礼申し上げます。40周年事業としての式典なども新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期となり、組合員の皆様方にも多くのご負担をおかけいたしました。ご理解をいただき、今回開催に至り感謝の念でいっぱいです。

顧みますと30周年を迎えた10年前も東日本大震災の対応で、予定された式典などを執り行うことが叶いませんでした。しかし、震災直後から全国各地の同業者の皆様より、多大なるご支援を頂いたことは、未来永劫忘れることはありません。ご支援の甲斐もあって、宮城県葬祭業協同組合としては、なんとか難局を乗り越えることが出来ましたし、組合員各社が請け負う１件１件の葬儀も日延はしたもののしっかりと対応し、また、県内各地での追悼式典などもサポートすることで、地域の葬儀社の本分を果たせたものと思います。

震災発生当時の倉島前々理事長、事後の対応に尽力された日下前理事長のお二方としても、ご支援を頂いた皆様に様々な機会で御礼を申し上げてはおりましたが、こうした節目に改めて衷心より御礼を申し上げたいという切なる思いが、40周年事業の主題のひとつだとも言えます。

今般の新型コロナウイルス感染問題によって葬儀の小規模化に大きな拍車がかかり、場合によっては従来のサービス内容のみならず、業態そのものにも変化が求められる事も考えられます。また、少子・高齢化が進む日本の社会は、人口減少時代に突入しました。

令和７年頃からは高齢者を中心に、150万人の人々が死を迎えると予測されています。誰もが葬儀に関わる時代が近づいて来ています。そのなかで、私たち葬儀社ができることは何なのか。葬儀社としての責任を自覚するとともに、その役割を果たしていかなければなりません。

今回、宮城県葬祭業協同組合青年部の皆様と将来の葬祭業、10年後、20年後の展望についてディスカッションをさせていただきました。これまで当組合の先達が築いてきた、儀礼における不変の姿勢を保ち、なおかつ改革すべき部分については、社会の変化にも対応できる柔軟性を持つという、相反する課題に取り組まなくてはなりません。若いリーダーたちの想いが詰まっておりますので、記念誌をぜひご覧いただければ幸いでございます。

時代の移り変わりとともに、お客様のニーズも多様化しております。宮城県葬祭業協同組合はともに共存し、私たちでなければできない本物のサービスの創出に全力を注いでまいります。同時に地域の皆様に必要とされ、信頼をいただき、なくてはならない存在として一体感を高め、本質を大切にしながらそれぞれが質の高い事業を継続していくことが組合の発展につながると考えております。

今後ともなお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。